

令和 7 年 度
宮崎国際大学 教育学部
総合型選抜 I 型（第 1 回）

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題

次の文章は、教育学を専門とする大学教授の齋藤^{さいとうたかし}孝さんが、「型」を身につけることの意義について述べたものです。齋藤さんの意見を要約するとともに、これまでの自分の経験も交えながら、学校教育の場で子どもが「型」を身につけることの意義について、600字以内で述べなさい。

相撲は、身体の芯がしっかりしていなければバランスを崩してすぐに倒されてしまいます。また、腰を落とし、踏ん張ることができなければ土俵に残ることができません。身体の芯をとらえ、効果的に踏ん張るために、何度も「四股^{しこ}」を踏みます。つまり、相撲の本質を深く理解し、その頂点を極めた過去の達人の暗黙知を、全ての力士に伝授する「型」の一つが四股です。

「これが腰を落とすということか」

「これが踏ん張るということか」

言葉では伝わらない極意のようなものが、身体で分かるようになっていきます。これが「型」のメリットです。「型」とは、才能やセンスがない人でもある程度のところまでたどり着ける、理にかなったメソッドなのです。

これはスポーツでも同じです。野球のバッティング、ゴルフのスイングも、「このフォームで振ればある程度まではできるようになる」という基本の「型」があります。

バスケットボールの部活動を描いた、井上雄彦^{いのうえたけひこ}の漫画『SLAM DUNK』でも、そのことを描いた有名なシーンがあります。全国大会直前の練習で、主役の桜木^{さくらぎ}花道^{はなみち}が、監督の安西先生にこう尋ねます。

「…何をやっていいんだ？」

「シュート2万本です」

桜木花道はその答えに驚くことなく、「2万で足りるのか？」と言います。一週間で二万本のシュート練習をおこない、自らの身体にその「型」を叩き込みます。その結果、本番でシュートを決めることができました。本来、自分のものとして身につけるためには、そのくらいの鍛錬が必要なのです。何もないところから自分なりの「型」を開発することを考えれば、楽なものです。

実は、これまでの学校教育で重要視されていた知識詰め込み型の「伝統的な学び」には、「型」のような学びのメソッドが多用されていました。「読み書きそろばん」と言われた時代には、そろばんという「型」がうまく働いていた。書道などでも、はねやはらい、右上がりなどある程度の決まりを「型」として身につけることで、それなりの字が書けるようになります。時代によって変わらない普遍的なことに、「型」は有効です。時代に変化があっても、それがゆっくりであれば、一つの「型」が長く使えます。

しかし、時代によってどんどん変化する「型」もあります。スキージャンプ競技では、現在はスキー板をV字に開く選手がほとんどです。でも、かつては板を揃えて飛ぶ人がほとんどでした。テニスでも、今はバックハンドを両手で打つのが主流ですが、昔は両手打ちは変則的な技術でした。このように、「型」が変化し、その変化に柔軟に対応することが求められる場合には、基本の「型」をアレンジしていく必要があります。

しかしだからといって現代には「型」は不要だ、無駄だということではありません。「学び」には素地が必要だからです。「型」は基礎知識と言ってもいいでしょう。基本の「型」を知っていれば、その「型」を基準にして、求められる方向にアレンジすることができる。

武道やスポーツでも、「学び」でも、大切なのは、自分にとって基準となる「型」を知り、身につけ、必要なときにはその「型」だけにとらわれず、新たなチャレンジをすることなのです。

(齋藤孝「人生が面白くなる 学びのわざ」による・一部省略がある)